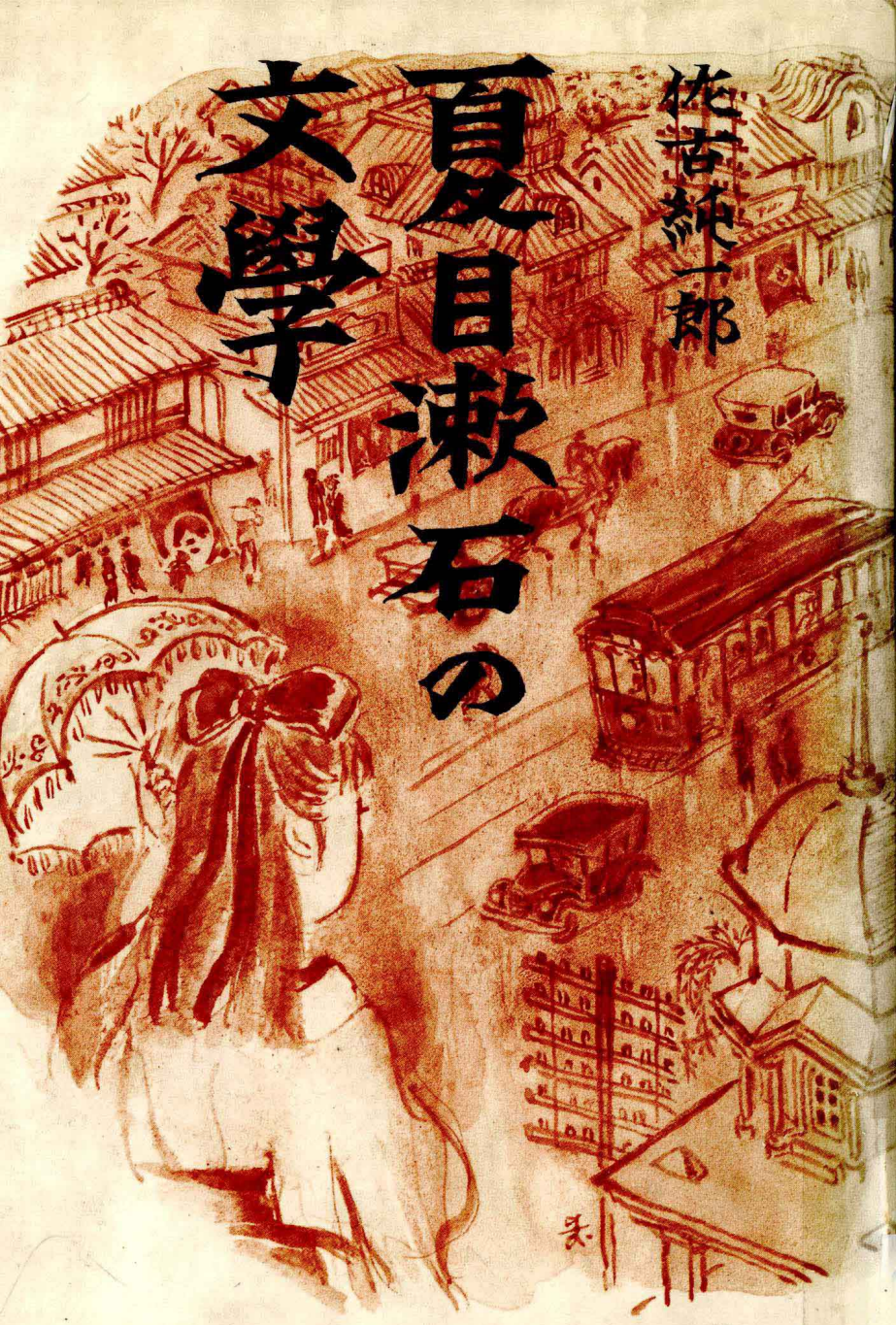
夏目漱石の文學

佐古純一郎



朝文社

夏目漱石夏目漱

朝文社

佐古純一郎（さこ　じゅんいちろう）

1919年徳島に生まれる。二松学舎専門学校を経て、日本大学法文学部宗教学科卒業。現在、二松学舎大学教授。日本キリスト教団中渋谷教会名誉牧師。

著　書

『佐古純一郎著作集』(全８巻)のほか、『近代日本文学の倫理的探求』『人間の探求』『親鸞』『芭蕉』『夏目漱石論』『パウロと親鸞』『三浦綾子のこころ』など多数。

学術雑誌『論究』(季刊)を主宰。

夏目漱石の文学

1990年2月14日　第一刷発行

著　者――佐古　純一郎

発行所――朝文社

〒一一一三
東京都文京区本郷三―三十一―一
盛和ビル
電話(〇三)八一四―五〇七二

●ご愛読いただきありがとうございました。
本書の読後感、ご意見などをお寄せください。

©1990 Jun-ichiro Sako
落丁・乱丁本はお取り替え致します。

ISBN4-88695-017-5 C0095

夏目漱石の文学——目　次

目次

第一章　漱石文学の構造　5
第二章　『虞美人草』　27
第三章　『三四郎』　55
第四章　『それから』　81
第五章　『門』　109
第六章　『彼岸過迄』　135
第七章　『行人』　159

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

第八章　『こころ』　189
第九章　『道草』　217
第十章　『明暗』　243
補　章　講演『夏目漱石と現代』　271
あとがき　285

装幀　大内秀夫

第一章　漱石文学の構造

今日は第一回ですから、序論という気持ちでお話をします。しかし、次からは漱石の作品を皆さんとご一緒に考えるという形で、あまり私の抽象的な議論を申し上げるのではなくて、できるだけ小説に即して考えていきたいと思います。

できましたら私の希望としましては、それぞれの作品を一度くらい読み直してくださいますと大変結構かと存じます。やはり文学は作品を離れてはあり得ないのですから、作品を読むということが何よりも大事なことです。それで、この後九回ご一緒に読みましたら、漱石の文学については、皆さんもかなりのご理解をお持ち願えるのではないかと考えております。

最初である今日は、「漱石文学の構造」という題を出させていただいています。夏目漱石は大正五年に死にましたが、まだ五十歳なんですね。今日の感覚からすると、漱石は相当年寄りのように考えられるんですが、よく五十歳でこれだけの文学的な遺産を残したものだと思うんです。慶応三年、一八六七年に生まれておりまして、大正五年、一九一六年に五十歳で死んで

おります。

小説家、文学者としての夏目漱石は、『我輩は猫である』でもって小説活動に入ったわけですから、この作品から出発した小説家であると、普通、考えられます。もちろんそれは間違いでないと思います。

正岡子規が始めて、子規の死後は、高浜虚子が受け継いで、今もずっと続いております「ホトトギス」という俳句の雑誌がありますね。通称で『猫』と呼ばれる『我輩は猫である』は、この「ホトトギス」の明治三十八年一月号に最初に発表されました。このとき、漱石はもう三十九歳になっています。これ以前に漱石は小説を書いていない。だから、夏目漱石という作家は比較的遅く作家活動を始め、最初は『我輩は猫である』であったということは間違いではないんです。

小説家漱石というふうに考えると確かにそうなんですけれども、文学は必ずしも小説だけではありません。漱石の文学を考えますとき、これでは全体がつかめていないことになると思うんです。夏目漱石は明治十四年、まだ十四歳の少年として、九段にありました二松学舎に入って、漢文、陽明学を主とした中国の古典を勉強するわけです。この意味では、漱石は私にとって大先輩に当たるわけです。私は戦争中、専門学校時代の二松学舎で勉強したんですが、漢文と漢詩を必須科目としてつくらされました。私もほんとうに三年間、毎週、漢文を一つと漢詩

をつくらされて鍛えられました。

漱石のときには、漢文は毎月、五のつく日に題が出るんです。それで三回。漢詩は五のつく日に題が二つ出るわけです。五のつく日は三回ありますから、一カ月に六首の漢詩を、必ずつくらされたという記録がございます。偶然ですが、二松学舎大学の図書館の倉庫から、ちょうど漱石が入った明治十四年の一年間に出された課題の一覧表が残っていて、出てまいりました。これは、先年、私が研究室で出している雑誌に資料として発表したんですが、漢文は必ずしも文学と考えることはできないのですが、漢詩は非常に大事なのです。中国の文学では、漢詩を無視して考えられないわけです。夏目漱石は、十四歳のころから漢詩をずっとつくっているわけです。

今、漱石が残した漢詩が二百七首残っております。これについては、吉川幸次郎先生をはじめ多くの先生方が全部にわたって注釈書をつくっておりまして、私も、先年、大学院の学生と一緒に勉強して、この二百七首について全注釈書をつくりました。これは「漱石詩集全釈」というので出ております。漱石は最後に『明暗』という小説を大正五年に書いていますが、途中で、胃潰瘍で死にまして、結局、『明暗』は未完成で終わります。しかし、この『明暗』は朝日新聞の新聞小説として百八十八回まで続けて、一日分一日分を正確に書いているんです。休みなく書いております。そして、午前中『明暗』を書き、午後に漢詩をつくるんですね。日記

を書くように漢詩を、大体一首ですが、多い日には二首、一番多い日には三首もつくっています。この漢詩には日付が入っていますので、午前中『明暗』のどこのところを書いて、午後から夜にかけてどの漢詩をつくったかというのが完全に対照できるんです。これは非常に珍しいことです。最後に『明暗』と並行してつくった漢詩が七十七首あり、これは大変すばらしい漢詩です。

『明暗』のときには、どうしてもこの漢詩に触れないではお話が終わらないと思いますが、漱石は最後まで漢詩をつくっていたわけです。今、皆さんの中には漢詩などをおつくりになる方はあまりいらっしゃらないかもしれませんね。私なども学生時代に二松学舎で一応手ほどきは受けたんですが、今、漢詩をつくれといっても、もう全くつくれません。

漢詩をつくるには、平仄とか、韻とか、なかなかややこしい規則がありますから、そう簡単につくれませんね。しかも、漱石は、午前に小説を書いて、午後は毎日のように、すばらしい漢詩を最後までつくれたんですね。その力はどこで養われたかというと、十四歳で二松学舎で受けた手ほどき以外にちょっと考えられない。

*

そのように考えますと、小説を書き始めたのは、確かに三十八年の三十九歳という、漱石としては比較的晩年のほうに近いけれども、漢詩を考えるならば、もう少年の日から漱石は文学

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

をつくっていたわけです。やがて東大、もとの東京帝国大学の英文科に入るわけです。漱石が東大の英文学科の第一号で、最初は英文学科に入学したのは漱石一人だったそうです。そして、正岡子規が一クラス上で、漱石ととても親しくなるんです。

おそらく正岡子規の影響と考えて間違いないんですが、漱石は俳句をつくり始めます。明治二十二年ころから子規は結核を煩って血を吐いたりします。その子規の病気見舞いのはがきに俳句を二句書いているのが、漱石の俳句の一番最初なんです。私は俳句はつくらないんですが、この二句は私が読んでも、これが俳句かと思われるようなうまくない俳句なんです。しかし、漢詩と俳句は並行してつくりますが、やがて、漱石は明治二十八年に愛媛県の松山中学の英語の教師になっていきます。松山はもともと俳句の盛んなところで、正岡子規や高浜虚子なども松山出身です。

漱石は松山に行ってからは、漢詩もつくってはいるんですが、むしろ俳句に没頭いたします。ちょうど漱石が行っていたころ、正岡子規が病気を養うために松山に帰っておりましたので、子規の指導もあって刺激もあったかと思います。これはもう大変たくさんつくっていて、そして、漱石は俳句をつくりますと必ず正岡子規に見てもらって、子規が大分手を加えた形跡があるのです。松山には一年いただけで、やがて、二十九年には熊本の第五高等学校の英語の教授になって熊本に移ります。熊本では、もっと俳句に熱を入れることになります。その熊本時代

の教え子が寺田寅彦です。寺田寅彦も、漱石から手ほどきを受けたと思いますが、俳句をかなりつくっております。さらに、漱石は三十三年に文部省の留学生としてロンドンに行くことになります。

したがいまして、ロンドンに行く前には小説は一つもつくっておりません。また、小説家になろうという気持ちも持っていなかったと思われます。少なくとも松山から熊本時代には、漱石という名前は俳人というか、俳句のプロと考えられて、かなり知られていました。漱石という号は、漢詩でも用いますが、むしろ俳号と考えてよく、少なくともこれは小説家としてつけたペンネームではありません。そして、俳句も最後まで、ずっとつくり続けまして、現在、漱石がつくって残した俳句は二千六百句を数えるぐらい残っているのです。大体、専門的なプロの俳人でも、二千数百首を残している俳人というのは、これは多いほうです。確かに小説家漱石と考えますと三十八年に『我輩は猫である』を書いたのが始まりです。しかし、我々が漱石の文学として考えるとき、小説だけでなく、小説以前における漢詩と俳句を考えなければならないと思います。

*

今申しましたように、漢詩、それから俳句から出発をして、その後に『猫』が書かれるわけです。この作品も、今の『猫』が最初から計画されて書かれたのではないんです。これはいき

さつがありまして、漱石は、ロンドンでひどい神経衰弱にかかるんです。一説には、自分は日本では高等学校の英語の教授で、そして東大の英文科の第一号生ですから、日本では自分以上英語ができるのはいないぐらいの自信を持っていたのかもしれない。ところが、向こうへ行ってみたらさっぱり自分の英語が通じない。下宿のおかみさんにも通じない。それですっかりコンプレックスに陥ったらしいんです。それからもう人と話をするのが怖くなって、部屋に閉じこもってふさぎ込み神経衰弱になったんじゃないかなどと言われています。

しかし、別に呼び戻されたのではないんですが、ロンドンから帰ってくるわけです。そのときも、神経衰弱は少しもよくなっていないままでした。帰るときに一つ希望があったのは、正岡子規に再び会えるということでしたが、船の中で正岡子規が死んだという知らせを受けるわけです。それでまた、もう帰っても正岡子規もいないと、愕然としてしまう。

そこで、漱石があまりにもふさぎ込んでいるから、とにかくみんな心配したわけです。特に正岡子規の後を受け継いだ「ホトトギス」の高浜虚子が非常に心配していました。そのころ、虚子を中心にしてお弟子さんたちが「山の会」を開いていたのです。俳句ではないが、俳句的なニュアンスの文章をつくり、みんなで持ち寄って、批評をし合っていました。それで、高浜虚子が、まあ、君も気晴らしになるかもしれないからつくってみろと勧めるんですよ。漱石も興味が持てたものと見えまして、それじゃつくってみようかと言ってつくったのが、今の

『猫』の第一章の部分。これはしかし、今のままではないんですよ。だから、この第一回は、今のような『猫』をずっと書くなんていう気持ちで書いたんじゃない。

ところが、それが大変評判がよかったわけです。やっぱり人から自分の文章が褒められるということはうれしいですね。多少、虚子が手を加えているんですけれども、虚子はそれを「ホトトギス」の明治三十八年一月号に発表するわけです。そのときは、一回きりなんですよ。それで、評判のよさもあり、もう一つ書いてみたらどうかと虚子が勧めて、今の第二章の部分を書くんです。ところが、これがまた大変な人気、評判だった。そこで、高浜虚子が、これをずっと続けてみたらどうかと言い、漱石も乗り気になりまして、第三章以後は現在の『猫』の構想を立てて、はっきりと書くわけです。ですから、よく気をつけて読んでみると、『我輩は猫である』の第一章と第二章と第三章とはちょっと味わいが違う。

今日では、『我輩は猫である』というと第一章から第十一章までですが、これを書いている間に松山時代を題材にして『坊っちゃん』も書くわけです。それから、『漾虚集』という、七つの短編を書きます。『我輩は猫である』は、やがてまとめられて上下の単行本になり、『坊っちゃん』も単行本になる。そして、有名な『草枕』がつくられるわけです。

『草枕』は明治三十九年、四十歳のときに、当時、東大系の人たちの雑誌でした「新小説」に一挙に発表されるわけです。漱石の『草枕』が発表された「新小説」は発売四日で完全に売

り切れたと伝えられております。これは大変な評判であった。大体、『草枕』の成功によって漱石の文学者としての名前、小説家としての名前は不動の位置を築くことになるんです。実は、この『草枕』の人気、評判が高かったことが、やがて漱石が朝日新聞のお抱えの専属作家になる機縁を与えているのです。

朝日新聞はもともと、大阪が本社です。それで当時、大阪の朝日新聞社の主筆というのか、編集面では一番偉い立場の鳥居素川が、『草枕』を読みまして非常に感激するわけです。まだ夏目漱石をよく知らないんですが、この『草枕』の筆者のような人を朝日新聞へ迎えようじゃないかという話になる。素川としては、大阪の社のほうへ迎えたかったらしいんです。しかし、何しろ漱石は東京帝国大学の先生ですから、東京のほうの朝日新聞の、当時主筆をしていました池辺三山に実際の交渉をやれということになり、漱石に最初は手紙を出したようです。

しかし、明治四十年ごろでは、帝国大学の先生と言えば大変なものだった。その夏目漱石が、東京帝国大学の先生をやめて新聞社に入るというわけですから、周りは、それは大変な反対があった。新聞社は当時からブン屋と言われていたりして、漱石も大分迷ったらしいです。けれども、一つには、漱石がロンドンから帰って最初に東大でやった講義は文学論で、本になっていますね。それから、英国の十八世紀の文学の評論みたいなもの。けれども、これは今我々が読んでも難しい。だから、当時の東京大学の学生は、これは全くわからなかったらしく、全然

興味を示さなかった。それで漱石は嫌になるんです。おれは大学で教えるのに向いていないんじゃないかと、少し嫌気が差していたようであります。

それから、一方においては、『我輩は猫である』以来、とにかく矢継ぎばやに『坊っちゃん』『漾虚集』『草枕』と、作家としての漱石の名声が相当上がってきておりましたし、漱石自身もかなりの自信を持っていたと思われます。それらのことから、やがて決断をいたしまして、東大をやめて朝日新聞の専属作家になるわけです。

*

人生にはいろいろ不思議な因縁がありますが、池辺三山と漱石について、ご紹介したいことがあります。池辺三山は本名を池辺吉之助というんですね。明治十四年に漱石が二松学舎に入るんですが、その年に二松学舎に入った人の名簿が二松学舎大学の図書館に残っているんです。偶然に明治十四年のだけ残っているのを、実は私が発見したんです。そして、その名簿を見ておりまして私がはっとしたことがある。漱石は、当時、まだ塩原金之助という名前になっています。ところが、その名簿に池辺吉之助だったと思いますが、この名前があるんです。漱石が何通か池辺三山に出した手紙が残っているわけです。そのときは必ず本名で出しているんです。それで、私が調べましたところが、何のことはない、夏目漱石と池辺三山は二松学舎の同期生なんですよ。けれども、二松学舎のときには二人はおそらく会っていない。なぜならば、当時

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo